

第5回訪問（7月27～29日）

訪問地：福島県福島市、郡山市、いわき市

支援聖書：聖書172冊、絵本聖書396冊、マンガ聖書55冊

震災後、4回にわたって宮城県、岩手県の被災地域を訪問して聖書支援を行なって来ましたが、今回は福島県の教会を募金部の菊池をはじめ3名の職員が訪問いたしました。福島県は原発事故の発生以降、現在もお放射線による深刻な被害が続いており、地震による被害、沿岸部の津波被害に加え三重の苦しみを受けている地域です。



福島いずみルーテル教会にて

27日、東北新幹線で福島市に向かい、そこで車に聖書を積み込んで日本基督教団福島新町教会を訪問しました。新町教会では地震で屋根の上の十字架が傾き煙突が崩落しそうになるほどの損害を被りましたが、会堂内で礼拝は守られているということでした。次に訪れた日本ルーテル教団福島いずみルーテル教会では、地域伝道のため英会話スクールを開いていましたが、震災後、他県に避難する子どもたちが多く生徒数が減ったけれども、外国人の先生が福島に留まって教えてくれていると野村先生は話されていました。夕方、訪問した日本バプテスト連盟福島旭町キリスト教会では、教会附属のこひつじ幼稚園で園庭の土を削って地中に埋めるという作業を行っていました。震災後、何人かの子どもたちが引越して行ったと話していましたが、それでも子供たちはストレスもなく元気に園で過ごしていると園長の小久保先生はおっしゃっていました。子どもたちに絵本聖書、マンガ聖書を手渡しつつ、できるだけ顔と顔を合わせて、じっくりと被災地の状況やニーズをお聞きしながらこれからも聖書支援を行っていきたいと思っています。



郡山教会の牧師館内部の様子

翌日、郡山市に向かいました。最初に訪問した日本基督教団郡山教会では、特に牧師館の被害が大きくて居住できない状態でした。しかし、地震による被害にも増して放射線の脅威の方が深刻で、特に子どもをかかえる家庭の不安感が大きく、郡山市でも福島市と同様に幼稚園、小学校の2割以上の子供たちが他県に避難している状況ということでした。「津波や地震の被害や瓦礫は目に見えるが放射能は見えない。福島では目に見えない放射線の恐怖に毎日脅かされる生活への不安がある。深呼吸ができない。子供を外で遊ばせてやれない。窓を開けられない。しかし、根本的な解決策がない。」と話された丹羽先生の言葉が胸に重く残りました。次に訪れた日本バプテスト連盟郡山コスモス通り教会では、原発から20キロ圏内の町村から避難して郡山市内の仮設住宅で生活している人々に対して支援活動を行なっているということでした。翌28日に訪れた、いわき市の日本聖公会小名浜教会でも仮設住宅で暮らす人々に支援活動を行なっていると伺いましたが、震災後の物資支援から、現在は高齢者に対する車の送迎や雇用相談、心のケアなど生活支援の方に活動の内容が変わってきているということでした。教会附属の聖テモテ幼稚園でも一時は3分の2の子どもたちが避難していましたが、沿岸部にあるいわき市は海風の影響から放射線の値が内陸地域より低いということが伝わって最近やや人々も町に戻って来たと話していました。その後、日本同盟基督教団いわきキリスト教会、カトリックいわき教会を訪問して東京に戻りました。

日本聖書協会では9月16日に福島市内の音楽堂でクリスチャン歌手の沢知恵（さわ・ともえ）さんによる慰問コンサート（入場無料）を福島の皆さんをお招きして行います。今後も被災地の復興を願いつつ支援を行なってまいります。これからも、お祈りとともに、どうぞご支援を宜しくお願いいたします。